

北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association

<北海道熊研究会 会報> 第 108 号 2022 年 1 月 22 日

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

ご意見ご連絡は本紙送信 email ではなく、下記の email へお願い致します

e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

既報会報の 1~107 号は Website に「北海道野生動物研究所」と入力しご覧下さい

「北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association の活動目的

熊の実像について調査研究し、熊による人畜及びその他経済的被害を予防しつつ、人と熊が棲み分けた状態で共存を図り、狩猟以外では熊を殺さない社会の形成を図るための提言と啓発活動を行う。この考えの根底は、この大地は総ての生き物の共有物であり、生物間での食物連鎖の宿命と疾病原因生物以外については、この地球上に生を受けたものは生有る限りお互いの存在を容認しようと言う生物倫理(生物の一員として人が為すべき正しき道)に基づく理念による。

本号では、一般財団法人 日本熊森協会

名誉会長 森山 まり子 氏から、寄稿戴いた

<本州と四国の熊問題で、現在何が問題なのか、その解決策を含めての論考を掲載します>

< 1 > 青森以南のクマ問題 (月輪熊 Ursus thibetanus)

日本のツキノワグマ問題と言っても、青森から本州南部・四国まで、かなり生息環境や生態が違うため、問題点と対策を論じるには、地域に分ける必要があります。

本州の月輪熊(Ursus thibetanus は、日本列島では、現在、本州と四国に現棲し、かつては、九州にも生息していたが、九州での目撃情報の最後は、門崎の知見では、「北海道新聞 2000 年 3 月 19 日版」記事に、九州では 2000 年 3 月 17 日午前 8 時半頃に、大分と宮崎の両県境の傾山カムキヤマ(1602m)で、砂防ダムの建設現場に向かって居た複数の作業員が、体長約 1.5m の母熊と体長 70cm 程の子熊 1 頭 (子の年齢は満 1 歳:門崎注記) を、目撃したと言うのが、最後で、以後、絶滅した事になって居る:門崎注記

< 2 > 生息地を破壊されたことによる絶滅の恐れ

四国、西日本、紀伊半島、東海、などは、程度の差こそあれ、絶滅の恐れという大問題があります。九州は絶滅したとされています。四国は残り 20 頭程度であることが確認されています。紀伊半島は残り 100 頭ではないかと言われて久しいのですが、こちらは調査すらされていません。絶滅は時間の問題です。

(参考)

環境省指定の絶滅の恐れのある地域個体群：下北半島、紀伊半島、東中国、西中国、四国山地

県指定の絶滅の恐れのある地域個体群 中信高原・八ヶ岳（長野県）、富士（静岡県）

< 3 > 原因は、戦後の拡大造林政策や大規模林道政策

によって、人間がどんどん奥山に入り、クマたちの生息地を大破壊してしまったことです。奥山に延々と続く人工林の中は 1 年中真っ暗で、食料が何もありません。また、植林したスギの苗木をクマに皮剥ぎされないように、養蜂業者が巣箱をクマに壊されないように等の、被害防止のため、懸賞金付きでクマを有害捕殺し続けたことも数の激減を招き、絶滅が危ぶまれるようになった原因の一つです。21 世紀になってからは、地球温暖化が原因と言われていますが、わずかに残された天然林がナラ枯れと言ってミズナラ中心に猛烈に枯れてしまったり、ブナの実のシイナ化が進み、実がなくても殻だけで食料にならなくなったり、クマたちの生存はますます難しくなっています。

< 4 > また、これは最近の全国的な問題ですが、2050 年のカーボンニュートラル

(炭酸ガスの人為的排出のゼロ化) めざして政府が再生可能エネルギー事業を規制緩和したため、猛烈な勢いで今、わずかに残されていた奥山の天然林が伐採され続けています。メガソーラーや巨大風力発電が奥山に集中する原因の一つは、地価が安いからです。クマは、さらに生息地を失い、人里に出て来るしかない状況に追い込まれています。

< 5 > クマへの恐怖をあおるマスコミ報道

ツキノワグマは臆病で人間を大変恐れており、人を襲う習性はありません。しかし、マスコミがセンセーショナルに人とクマとの事故を、「クマが人を襲った」と報道するため、国民はクマは人を襲うと誤解してしまい、危険動物を早く最後の一頭まで殺してほしいと要望するようになっていきます。本気でクマが人を襲えば、死者が続出するはずですが、ほとんどの人身事故はひっかき傷です。これは、臨界距離内で人に出会ったクマが、人を恐れ、人から逃れたい一心で人に歩み寄り、人をひっかいて人がひるんだ隙に逃げようとするもので、「襲った」という報道言葉を止めない限り、人々は誤解し続けて、クマを殺せと言い続けることでしょう。昔から、クマと共存してきた奥地の人たちは、クマなんて優しい動物で、何も危険性などないと今も皆さん言われています。

< 6 > 果樹や農作物被害

西日本では、クマによる農作物被害はほとんどありません。山の実りの凶作年に、農家の柿やクリを失敬するため、夜こっそりクマが出て来ることがありますが、そもそも商品用として育てているわけではない上、過疎化高齢化が進んで最近では実が実っても採る者もおらず放置されているため、被害額に計上されません。ただし、本来のクマを知らない地域では、人身事故を恐れて、行政に柿の実に来たクマの有害駆除を申請されます。行政は、民家近くにある柿の木などを伐採するように指導しているため、農村風景から柿の木が消えてしまったところも多く出ています。民家の柿の木の実はクマだけではなく、カラスやキツネなど多くの生き物たちが頼りにしていたもので、多くの生き物が悲しんでいると思います。そもそも、農家が庭に柿を植えていたのは、実を採るためだけでなく、防腐剤として柿渋などを利用してきたからで、そういうものを利用しなくなった現在社会では、農家の柿の木は不要になっています。人間が不要として放置しているものをクマに食べられた場合、被害と言えるのでしょうか。

< 7 > クマが里に出て来る訳はえさ不足

たまに3才ぐらいの冒険好きのオスグマが、人間の所を参考に見ようとして山から出て来ることがあると言われていています。このようなクマは、そのうち山に帰ります。しかし、山の実りの凶作年には、クマはえさを求めて山からどっと出てきます。餌を求めて出てきたその証拠に、次の年、秋に山の実りがいいと一斉に出て来なくなります。クマの研究者たちは、近年、クマが山から出てくるようになった原因を、次の5つにまとめて、マスコミでも発表しています。

- 1クマが爆発増加
- 2クマが人なめ（人をなめだした）
- 3クマが味しめ（農作物の方が山の物よりおいしい）
- 4クマが生息地拡大
- 5地元が里山放置

1～4はクマに原因があり、5は、地元の人たちに原因があるという主張です。戦後の国策であった拡大造林政策や奥山開発政策、地球温暖化など、人間側に根本的な原因があるのに、物言えぬ弱者に罪をきせるのはどうかと思います。

< 8 > イノシシやシカ畏への錯誤捕獲問題

イノシシやシカと違ってクマの農作物被害は余りないため、クマを駆除してほしいという声はイノシシやシカよりずっと少ないものです。しかし、イノシシやシカを獲るために奥山にまでかけられるようになった膨大な数のくくり罠に、クマが誤ってかかる例があとをたたく（錯誤捕獲）、大問題です。くくり罠に掛かってしまったクマから罠を外すことは麻醉銃や吹き矢を使える専門家以外は不可能なため、殺す必要のないクマまで結果として大量に殺されています。

< 9 > 山菜を採りに行って起きる人身事故

まだクマの棲む森がそれなりに残されている東北に行くと、国立公園内であっても、2車線の観光道路が奥地にどんどん新設されて行っています。大きな声や音を出して山菜採りに入ればいいものを、自分が見つけた良き山菜取りの現場を人に横取りされたくない余りに、そっと山に入る人があとをたちません。新設道路さえなければ、人が入り込むことなど不可能だった秋田の奥地での死亡事故現場を調査に行ったことがあります。あのような奥地にまで人が入り込むことが問題だと思いました。クマは人間を殺してやろうと思ったのではなく、人を避けようとしたと思われそうですが、何しろすごい力ですから、当たりようが悪ければ、死亡事故につながるのだと思います。

< 10 > 林業被害防止のための皮剥ぎテープ

クマに皮を剥がれないようにと、補助金で人工林のスギの木にびっしりテープが巻かれた光景をよく見かけます。しかし、スギの伐り出しが不可能な場所や、伐り出すとかえって赤字になる場所も多く、人工林としての材の価値がないところでは、クマがスギの木の皮を一方向剥いでも、どうせ売れない木なのですから、被害と呼べないと思います。

< 11 > 山形のスイカ畑や宮城のデントコーン畑での農作物被害問題

現地に行くと、クマ捕獲罠があちこちにありますが、被害防除対策はほとんどゼロです。山奥に開墾されたスイカ畑で、不要になったスイカが山済みされているのを見ました。クマが出て来ると言われても、そんな場所でクマの大好きなものを無防備に作っている人間の方に問題があると思いました。また、宮城に行ったとき、全く無防備なデントコーン畑や、山奥に養魚場がある所にクマたちが通って、死んだ魚が積み上げられているのを毎晩食べているところもありました。養魚場の社長は次々とやってくるクマを罠で獲っていましたが、被害防除をまずするようにと指導もせず有害捕殺許可をおろし続けている行政にもあきれました。この国では無用の殺生が大々的に行われています。

< 12 > 私たちはどうすればいいのか

本州以南の熊問題に関しては、人間が奥山から撤退して、祖先がしていたような棲み分け共存を復活させる以外に根本的な解決法はないと思います。

奥山で林業をしたり、奥山を観光地化して大量の人を呼

び込むことを禁止しない限り、この国では人とクマとの共存は不可能だと思います。

生息地再生と被害防除対策です。現在は、ワイルドライフマネジメント派の研究者たちが、日本中を牛耳っており、素人である行政に個体数調整捕獲と称して殺害一辺倒のクマ対策を取らせていますが、倫理的にも、生態系保全上からも、水源の森確保の面からも、政策の180度転換が必須です。ワイルドライフマネジメント派の研究者たちは、毎年クマを大量に捕殺して、数の低減を図っておけば被害問題が解決するという考えにとりつかれているようで、なぜか生息数や適正頭数を推定することや、どうしたら大量捕殺ができるかのみに躍起のようです。クマが何頭いても、山から出てこなければいいのであって、個体数調整対策よりも、祖先がしていたように棲み分け共存対策や、被害防除対策にこそ、まず、税金を使うべきでしょう。

(了)